

A study of designing a pedagogical space for students to speak out in English

教科・領域教育専攻

言語系（英語）コース

碓川 友規

指導教員 山森 直人

1. 研究の目的と動機

現在学校現場では、子どものコミュニケーション能力の低下や教師と子どもの人間関係の希薄化など様々な問題がある。文部科学省（2008）は学習指導要領の改訂にあたり、子どもの言語能力育成の重要性を主張している。斎藤（2004）は、言葉になりにくい感情をあえて言葉にすることで、気持ちに整理がつき、感情に形が与えられる（斎藤, 2004, p.18）と述べている。このような主張が、文部科学省が子どものコミュニケーション能力育成に関心を持つ一つの要因であると考えられる。浦他（2007）は、英語でのコミュニケーション力は日本語のコミュニケーション力とつながっている（三浦他, 2007, p.30）と述べている。このように考えれば英語教育は言語の教育であるから生徒の言語力、あるいはコミュニケーション力を育成する大きな役割を担っているといえる。学校における教師－子ども、子ども－子どもの人間関係上の問題の原因を言語の観点から解釈し、教室の中の言語空間を変えるような英語教育のあり方を追究したい。つまり、教室の言語環境と子どもの感情表現の乏しさとの関係に原因を求め、学級の言語空間を豊かに育てるための英語授業のデザインを考えるために、この主題を設定した。

2. 論文の概要

第1章では、本論文の背景や目的を述べた。背

景として、若者の表現力が衰退していると言われていることを挙げ、その理由として①現代の子どもは、言葉になりにくい感情を説明する際、「普通」、「微妙」といった言葉を頻繁に使用すること、②言いたいことを言語化する能力・相手の言っていることを理解する能力が足りないこと、③教師のコミュニケーション能力が不足していることの3つを挙げ考察する。英語でのコミュニケーション力は日本語のコミュニケーション力とつながっている（三浦他, 2007, p.30）ことから英語の授業で子どものコミュニケーション能力を向上させることは可能と考え、英語の授業を通して学級の言語空間を豊かに育てるということをこの論文の目的として設定した。

第2章では、コミュニケーション能力衰退の要因として、①コミュニケーション手段の変化、②子どもの遊びの変化、③核家族の問題、④地域住民との関係の希薄化の4つを挙げ、おのおのの要因が子どものコミュニケーション能力にどのような影響を与えているかについて論じた。

豊かな言語環境を構築するには、①共感すること、②あいさつ、③国語の基礎学力の3つを挙げ、その理由を解説した。「共感」では、概念として「コミュニケーションの累積＝理解」ではないということを理解し、互いを思いやることが豊かな言語環境に必要であることを示した。「あいさつ」では、学校生活に満足している子どもは、有意にあいさつスキル得点が高いことを明らかにし、あ

いさつの重要性を示した(金山, 金山, 前田, 2006, p.123)。「国語の基礎学力」では, 国語科の「基礎学力」が「人と関わる力」「人と交わる力」になる(鶴田, 2003, p.72)と考え, 国語科の「基礎学力」の重要性を主張していることを示した。

授業での豊かな言語環境構築に必要な理論として、①「アプロプリエーション」(ある事実に他者の言葉を取り入れ、自分の言葉で解釈すること)、②「リボイシング」(学術的作業を円滑にするため、子どもの社会性を養わせるために子どもの考えを教師が言い換えること)、③「フロアー」(心理的な時間や空間において何が起こっているか認識されるものであり、話題、または、からかいや応答などの機能、あるいは、その二つの相互作用により発展し、それは、一時の間に一人の参加者によって、あるいは、同時に複数の参加者によって、あるいは、矢継ぎ早にコントロールされ構築される)という3つの理論を示した。

3. 論文の成果

田尻氏、サンデル氏のリボイシングを観察し、リボイシングの重要性が示されたことは前節でも述べた。中学の英語教育でも英語によるリボイシングが可能であることから高等学校の英語教育でも可能であることが裏付けられた。高校生は中学生よりも思考力が発達していることからサンデル氏が行ったような議論形式の内容を取り扱い、子どもの思考力を刺激した方がより良い結果が得られると推察できる。英語による議論を経験することで英語力だけではなく母語である日本語力も向上し、延いてはコミュニケーション能力の向上にもつながる。フロアー理論を理解した上で、子ども同士が議論することで互いを知る良い機会となり、社会性も向上する。

田尻氏は自信の授業の中で、英語によるリボイシング、日本語によるリボイシングを使い分け、子どもの思考を刺激し、意見を引き出そうとしていた。それに対しサンデル氏は、対話というよりも学生同士で刺激し合う関係を創り出すために学生同士で議論させ、その議論をリボイシングするという傾向があった。アプローチ方法は多少違ってはいるが、リボイシングによって新しい意見や表現が生まれていることからリボイシングの重要性が示された。

4. 今後の課題

- ①より多くの英語教師のデータを分析する必要がある。
- ②進学校や困難校など、様々なタイプの学校での授業を分析する必要がある。
- ③この論文が高等学校の英語教育に焦点を当てていることから、高等学校の英語授業の分析をする必要があること。

【引用文献】

Saito, T. (斎藤孝) (2004)『コミュニケーション力』
東京: 岩波書店